

孤独のすすめ 五木寛之

人生後半の生き方

「生きている」理由について、五木寛之は「自分なりの答えらしきものはある」と書いているが、具体的な答えを明確に書いていない。

「秋」という字の下に「心」と書いて、「愁」という言葉があります。

同じ「うれしい」でも「憂」は国を憂えるなど何か対象があつての心のわだかまりですが、「愁」は自分自身の問題です。なんとなく心が晴れず、もの寂しい心持ち。それが愁(うれい)でしょう。春愁というのも、そのひとつです。

神戸のほうで内科を開業されていた医師で、五十嵐久雄さんという方がおられました。播水(ばんすい)という名で俳人としても活躍された方です。この方の晩年の作に、

#### 春愁や老医に患者のなき日あり

という句があります。私はこの句が好きで、桜の季節になるといつも思い出すのです。俳句や川柳というのは、その句の背景を勝手に想像するのも楽しみのひとつです。

老いにさしかかるにつれ、孤独を恐れる人は少なくありません。

体が思うように動かず、外出もままならない。訪ねてくる人もおらず、何もすることがなく、無聊(ぶりょう)をかこつ日々。世の中からなんとなく取り残されてしまったようで、寂しいし、不安だし、人によっては鬱状態におちいりかねない。

読書とは、著者と一対一で対話するような行為です。体が衰えて外出ができなくなっても、誰にも邪魔されず、古今東西のあらゆる人と対話ができる。本は際限なく存在しますから、孤独な生活の中で、これほど心強い友はありません。

老年期の一番の問題は、生きる力が萎えることです。生きていこうという気力さえ、萎えてしまう。鏡を見ては、「ああ、こんなふう到老いてしまった」と落ち込み、「体が不自由で、もうなんの楽しみもない」と絶望する。聴力が落ちたため、「えっ？」と何度も聞き返し、そのたびにみんなにイヤな顔をされる。そういうことも含めて、老いていくと、マイナス感が次第に増えていくばかりです。

「自分が八十歳を過ぎてまで生きているなんて、信じられない」というのが、私の本当の実感です。

では、あえて養生などに心を配りながら、こうして「生きている」理由は、いったいどこにあるのでしょうか。

自分なりの答えらしきものはあるのですが、その前に「生きる」ということについて、...

笑われるのを承知で言えば、私は「この世界がどう変わっていくのか、見ていたい」だけなのです。日本だけではなく、アジアが、世界全体が、この先どのような変貌を遂げていくのかを目撃したい。知りたい。そのために長生きがしたいと思う。

現在は人生百年時代といっても過言ではないほど長寿の方が増えていますから、「林任期」は五十歳から七十五歳までと考えてよいでしょう。私には、この時期こそが人生の黄金期のように思われるのです。

経済成長がストップし、人口が減少モードに転じるなど、明らかに下り坂の局面に入った日本。その国が、このまま**嫌老社会**の入口にあることを「自覚」せずに歩んでいくならば、それはやがて広範な「嫌老ヘイトスピーチ」に転化し、「老人階級」とそれ以外の世代との、シビアな「階級闘争」を呼び覚ますかもしれない、というのが私の考えた妄想でした。

経済的に余裕のある人間が、どうして補聴器のようなもので悩まなければいけないのでしょうか。あれからかなり時間が経ち、巷ではドイツ製の何十万円もする補聴器なども売られています。しかし、残念ながら、「この補聴器に完璧に満足しています」と話す人に出会った記憶は、私にはありません。

では、はたして、「みんなが満足できる補聴器」は夢物語なのでしょうか。

そんなことはないはずです。小型で高性能のスピーカーやイヤホンを生み出す日本メーカーの技術を振り向ければ、普通の人が聞いているのと遜色のないような高音質の補聴器が造れないはずはない、と思うのです。

できないのは、メーカーに主要なユーザーである高齢者の声が届いていないからではないのか、というのが私の見立てです。

高齢者は、人生という山を下る途中にいます。基本的に、もう家を建てる必要はありません。高級車もヨットも、「どうしても欲しい」というものではないでしょう。

しかし、もし、見る力、聞く力、噛む力、歩く力といったものを、十代、二十代に戻してくれる道具や手法があったら、どうでしょう。それになら、いくら出しても惜しくない、と感じるはずです。

世界最高の視力矯正手術、自然に聞こえる超小型補聴器、自然の歯よりも丈夫で具合のいい義歯、快適な歩行補助器……。そういったものの開発に、資金や人的資源を集中させるべきではないでしょうか。

ともすれば「社会のお荷物」になりかねない高齢者に、「静かに」していてもらうのではなく、より一層、社会の前面に出て奮闘してもらおう。ただ時間潰しに日銭を稼ぐといった立ち位置ではなく、国力アップの推進役を務めていただきたい。

おわりに

「回想」のすすめ

ある程度、高齢になってくると、誰でも気持ちが沈むことがある。初老期の鬱のような病的なものもありますが、そうでなかったとしても、同世代の友人や知人がどんどん欠けていったりすると、なんとなく心寂しくなるものです。

私の場合も、井上ひさしさんも永六輔さんもいなくなった、野坂昭如さんも大橋巨泉さんもいなくなったと思うと、なんとなく気持ちがシーンと静まり返ります。そういう気持ちの沈みとどうつきあうかも、下山期の課題です。

最近、未来を考えるより、むしろ昔を振り返ることが大事だと思っています。記憶の抽斗を開けて回想をし、繰り返し記憶を確かめるたびに、ディテールが鮮やかになってくる。それが、日々の楽しみになるのです。